
ハートの確率

黒羽ヴィヴィオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートの確率

【Nコード】

N2025P

【作者名】

黒羽ヴィヴィオ

【あらすじ】

マジック好きな高校生黒羽快斗は幼馴染に淡い思いを寄せながらも怪盗キッドとして活動している。そんな彼の幼馴染の青子はある日とあるものを見てしまい――

距離感

「ねえ青子って好きな人いるの？」

昼休み。女子が集まれば当然、自然と恋話に入ることも少くない。今まで聞くだけの側だった青子が、突然クラスメートに問われたのだった。

友人たちの話を聞いて恋というものに少し憧れるものの、それがどういう気持ちになって告白するとか付き合うとか彼氏とかなんて分らない。もちろんそういう対象を持ったことも今までない。恋愛というものを鮮明に感じるのは、ミュージカルとか小説とかドラマとかである。

「え？ いないよ」

確かに言われれば告白ということのをされたことも一度もない。

「――快斗君は違うの？」

「ええ？ 違うよ。快斗はただの幼馴染だってばあ」

慌てて返す。快斗はマジックが大好きな青子の幼馴染のことである。よくクラスメートに旦那や夫婦などとかからかわれるものの、青子は快斗を恋愛の対象として見た事は一度もなかった。確かによくいつも一緒に居るし、どこかへ出かけたりするけれどそこまでの感情を意識したことはない。

快斗とはよく下らないことで喧嘩のラリーに発展することは度々あった。青子もつい剥きになってしまっ、言い合いをしてしまうことがある。でも結局二人はまるで雨降って地固まると言うようにすぐに仲直りするのだけだ。

青子はふと快斗のことがなぜか気になって、彼の方に視線を一瞬だけ向けた。すると、彼の新聞を握っていた手は、氷のように固まっている。どうしたんだろうか？

「快斗君も大変よね」

近くにいた友人が話していたのが聞こえたけれど、何が大変なの

かよく分からなかった。

★

放課後、青子はいつも通り快斗と下校する。彼とは常に一緒に居ることが当たり前のことだったから、人の目は気にしない。

「どうしたのよ、快斗？」

「別になんでもねーよ！」

快斗は今朝から機嫌悪そうな顔をしている。青子が心配して何度尋ねても、「別に平気だよ」、「オメーには関係ねえ」と言われてしまい結局話が続かなかった。もしかして朝のことが関係しているのだろうか？ まさか……聞かれてないよね。

話題を変えてみようと、青子の頭にある言葉が一瞬過ぎった。

「ねえ……快斗ってさ好きな人とかいるの？」

「はぁ？ いるわけねーじゃん」

やっぱり快斗も恋愛ごとには興味がないのだろう。青子が心の中で勝手に納得した。

距離感（後書き）

初めまして。黒羽唯です。

主に書くのはまじっく快斗だと思います。

これからもよろしくお願いいたします。

いつまでも平行線

快斗はいきなり青子から「好きな人いるの？」と質問されて、心の中ではもしかして……などと心臓を躍らせていた。快斗は青子のことを密かに思っているが告白したことは無い。

勇気が無いと言うのもあるが、最大なのは自分が彼女の嫌いなもう一つの姿であるということだ。もしそれがばれてしまったら、彼女との関係を壊してしまうかもしれない。今までのように入られない……それは幾度も思うことだった。

彼女はたぶん恋とかはまだよく理解していないはずなのに、なんであんなことを聞いて来たのだろう。よく分からなかった。また恵子たちにでも何かを吹き込まれたのか言われたのだろうと思う。

彼女のいつまでも隣にいたいという気持ちは誰よりも一番強いと思う。彼女を好きだと自覚したのは、時計台で初めて会ったときだった。父親をいつまでも大人しく待って、寂しそうな心を必死に押し込めていた彼女を元氣付けたくて薔薇を渡して、感謝の言葉を彼女に言われたときの笑顔がいつまでも忘れられなくて。十年近く経った今でもそれは忘れられない。

もしもう一つの顔になれば、告白だってもうとっくにしていたかもしれないのに。いつまでも彼女の一番の傍に入れると決めたのは自分だった。誰にも彼女のことは渡したくない。自分の心に強く誓ったことだ。

「はぁ……」

雑誌を駅近くの書店で立ち読みしていた快斗は深くため息をついた。彼女があんな問いかけをしたことには驚きを隠せないままदैいる。

（やはり青子もオレのことを……んなわけねーか）

快斗は雑誌を読み終えて、戻そうとする。そんな時、隣から声が飛び掛った。

「あれ、黒羽君じゃない。どうかしたのかしら、元気ないのね？」
その声の主は、茶髪のウェーブに切れ長の碧眼を持った華奢な体でランドセルを背負った少女だった。彼女は両手で胸元を覆い隠すくらいの大きさの本を何冊か抱えている。英字でタイトルが書かれているのを見るあたり――どうやら洋書のようなのだ。

「あ、灰原か」

灰原と快斗に呼ばれた少女は怪訝の色をその瞳に宿し、こちらを見ていた。灰原とはとあることで知り合い、時々会うことがある。といってもすれ違ったり偶然会ったりするだけ。それにしても多すぎると思ったが、最近の彼女はこの近辺に来ることがよくあるらしい。

「黒羽君こそ暇つぶしにでも来たのかしら？」

「まーな」

灰原は不機嫌そうな顔すると、レジに向かっていってしまった。

快斗は灰原を位置口近くで待っていることにした。

はいいろとあかいろ

「黒羽君、工藤君から聞いたわ。あいかわらず彼女とは進展なしなのね」

「は？ だからあいつはただの幼馴染だっつうの」

快斗は見た目はまだ小学一年生ほどなのに大人の雰囲気かもを醸し出す少女とともにファーストフード店へと来ていた。傍から見たら、一介の高校生とその妹が来ている様な光景であるが二人は全く持つて赤の他人であるし、灰原ははっきりいって今の姿は快斗と同じように本当の姿ではない。

「まあばれたら……相当なものでしょうね」

灰原はよく快斗の正体を知っているかのようなことを、さらっと言うことがある。やはり気づいているのかもしれないなどと、勝手に思うが探ったて仕方が無い。

快斗は注文したハンバーガーを夢中で頬張り、頭の中で次の計画を練っていた。ここ最近テストなどで忙しかったために一度も予告状などは出していなかった。そんな時、またあの鈴木財閥の相談役の鈴木次郎吉氏から挑戦状が叩きつけられたのだった。

あのジイさんは本当にこりねえな……などと漏らしたが、結局OKの返事を送った。テストが終わってからあまりやることもない。仕事するには絶好の期間なのだった。

仕事をすれば、またあの名探偵はお出ましするだろうし、警部も必ずやって来るはずだ。キッドを捕まえようとする奴は多いし、自分の命を狙っているものもある。そんな危険と隣りあわせなのは承知の上だ。名探偵に宝石を取り返さえそうになるのは目に見えている事。

それでも仕事をやらなくちゃならないのは全てパンドラのためだ。あれを壊さなくちゃならない。

そんなことを青子に知られてしまったら……もういられないだろ

う。彼女が苦しむだけなのだから。辛い思いをするのは自分だけではないんだ。

「あれ、黒羽くんが何でここに居るんですの？」

すぐ隣で灰原のものではない知った声が鼓膜に直接届いたのは――嘘でありたいと願っていたのだが、思わずした方を見上げてしまった。

そこにはなぜか、ここにはとても不釣り合いな燃えるように赤い髪に、鋭い碧眼を持ったまるで西洋の女性の画をそっくりそのまま描いたとでもいう様な少女――小泉紅子が立っていた。

彼女はその口元に妖しげな笑みをたたえて、灰原に訝しげな不思議そうな視線を送っていた。当の灰原はそれに怯むこともなく、無視したようにジュースを飲んでいる。

「あ、紅子がんでここにいんだよ？」

「――たまたま黒羽くんのお姿を見かけたから、気になりましたの。あら、そこに座られている方はなんてお名前なのかしら？」

灰原は紅子の問いかけに、反応をすぐさま示さなかったが、飲みかけのジュースをテーブルの上において、さっきまでしっかりと閉じていた口を開いた。

「黒羽君とは……そうね、お友達かしら？」

灰原は紅子を見ようとせず、ゆったりとした口調で、灰原哀と続けた。快斗は灰原に紅子のことを簡潔に話した。灰原は不機嫌そうな顔になり、

「じゃあね、黒羽君。またね」

そう彼女は告げると、店を出て行ってしまった。何が気に入らなかったのか。灰原の感情は本当に読み取りにくい。見た目は普通の小学生と反比例して、クールな雰囲気をも保っている。その暗い青色の瞳の奥に、真実を隠している少女の心の内は流石の月下の奇術師でも探偵と同じくらい手ごわいのだから。だからと言って、別に知ろうとはしないんだけれども。

はいろいろとあかいろ（後書き）

紅子ちゃん。彼女はまた出ます。やっぱり彼女が居てこそそのまじ快なので。

お誘い

「それにしても、あのさっきの灰原っていう女の子普通じゃないわね……」

紅子が、灰原の座っていた席に座りぼそつと呟くようにして放った一言。普通じゃないのは当たり前だった。さすがの魔女も彼女から別の何かを感じたらしい——何しろ灰原の本当の姿は小学生じゃないんだから。

「で、黒羽くんはまだ家に帰らないんですの？」

「ああ。ちよつと母さんに買い物頼まれてて」

暇などと適当に言えば、紅子につき合わされそうなので言葉を濁した。彼女がこれで納得いけばいいのだが。

「そう。じゃあ、また明日ね黒羽くん」

彼女は別れ際に妖しげな視線を快斗に送る。それを感じた快斗は背筋から何かがすつと抜けていくのを僅かに感じた。



三日後の日曜日は久しぶりの仕事だ。予告状を送りつけたのは、先週の水曜日の晩のことだった。予告状が送られてきた途端警視庁は、すぐさまマスコミに内容などを発表した。そのため、翌日のほとんどの新聞の一面にでかでかとキッドの予告状が載っていた。

「流石警視庁……」

今回こそと思うものの、いつもハズレばかり。返すタイミングは、常にあの名探偵に取り返されるのが殆どだ。あいつとは腐れ縁なのか判らないが、時計台で対決していた。そのときは彼だと知らないまま、鈴木財閥の至宝であるブラックスターを狙ったときにたまたま出逢った小さな名探偵と幾度もめぐり合っては——取られ返しつつの繰り返し。

小さな名探偵と、あいつが同一人物だったと知ったときは驚くこ

とはあまり無かった——どこかで無意識のうちに気づいていたのか
もしれない。

そんなこんなでパンドラを探しつつ、おやじを殺した奴らと戦っ
て。一向に見つからないパンドラを早く壊したい。そうすれば——
言えるのに。

「はあ……」

快斗はベッドの上に寝転がり、ため息を漏らした。それと同時に
机の上で、携帯が振動していた。

携帯を開くと、画面には青子の名前が表示されている。

「もしもし。あ、青子か？」

『うん。そうだよ。あのね日曜日あいてる？』

日曜日は駄目だ。予告日と重なってしまう。それよりも青子は何
でかけてきたんだ？

「ごめん。あいにく別の予定が入っちまってさ」

『じゃあ土曜日は？』

「空いてるよ」

『じゃあトロピカルランドいこうよ！』

青子の元氣そうな、何かを掴んで嬉しいとでも言うような明る
い声が電話の奥で反響する。思いがけない彼女の誘いに、快斗は口元
がにやけるのが判った。もしかしてそれってデートか？

「いいけど」

自分でも驚くぐらいに、素直に返事を返していた。いつもなら、
憎まれ口を叩いてしまうぐらいなのだが。しかし、青子は何でいき
なり言い出したんだろうか。

『本当？ 青子うれしい！ トロピカルランド前に十時ね！』

青子は快斗の返事を聞いて満足したのか、嬉しそうな声を出して
いた。そして彼女とじゃあねと言い合って電話を切る。

「しかし……なんでいきなりなんだ？」

電話越しの青子に押されるままに思わずOKを出してしまったが、
これは久しぶりのデートなのでは？ でも何であの青子がいきなり

快斗をトロピカルランドになど誘ったのだろうか。理由など全く思いつかなかった。

愛を鳴らせば

快斗が青子との待ち合わせ時間ちょうどに、トロピカルランドのゲート前に到着すると青子が居たのだった。彼女は、純白のワンピースをしっかりと着こなし、ピンクのリボンが飾りの麦藁帽子を被っていた。

「あ、快斗！」

彼女はにこにことした顔で、こちらへ駆け寄る。青子は駆け寄るなり、かわいい？と訊いてきた。彼女は一回転するなり、膝上ほどまでしかないスカートがふわっと舞い上がった。健康的な乳白色の太腿が少し見えて、視界にしっかりと焼き付けたのは言うまでも無い。

今日の彼女は一段と可愛らしかった。それでも、素直に感想を伝えられないのは彼女に一抹の申し訳なさを感じている。口が正直に言葉を紡いでくれない。

「お子様の癖に珍しい格好をしてるよな」

「むー！」

青子是不満げに頬をぷくっと軽く膨らました。そんな様子がどこか愛しくて可愛らしいと感じてしまいついからかいたくなる。そんな衝動を抑えて、園内へと入った。

★

いくつかアトラクションを楽しむと、時間は昼になっていた。過ぎるにつれて、レストランが混みはじめてしまうため快斗は青子を連れて何処か適当なカフェテラスを探した。案の定ラッキーなことに、席がちょうど一席空いているのを見つけて、そこをすぐさま確保する。

「青子、どうだった？」

「楽しいよ。すつごく。快斗付き合ってくれてありがとね」

青子はにっこりと笑みを浮かべて、返す。そんな彼女の表情は何処か満たされているようだった。彼女のそんな顔が見られたので、自分としては満足なのだった。

前にトロピカルランドに来たのは、自分が警部にキッドだとばれそうになったときだった。そのときは何とか乗り切ったけれど、今回はそんなことも無いからゆっくりと彼女と楽しめる。

「ねえ紅子ちゃんのことどう思っているの？」

快斗が昼食を頬張っていると、不意に青子が身を乗り出して聞いてきたので一瞬黙ってしまった。紅子と快斗のことを青子が聞くなんて無いだろうと思っていたからだ。いきなりの彼女の問いかけにどう答えればいいのか分からなかったが、

「ああ。ちよつと苦手かな」

軽く苦笑いをして、返した。それを聞いた彼女は何処かほっとした顔をしていた。どうして安心したのか、よく分からない。それになんで紅子とのことを尋ねてきたのかも。

彼女の様子は何処か可笑しく感じた。でも快斗が軽く意地悪しても返ってくる反応はいつもと同じだった。

「ねえ快斗次はさ、ミステリーコースターに乗ろうよ！」

食べ終わると、彼女が自分の手を握り腕を仕切りにひっぱった。傍から見ればまだ付き合いだしたばかりの若いカップルそのものだが、生憎自分たちはまだそこまでは進んでいなかった。

クラスメートたちがもしここに来ている、自分たちが居るところを見られたら凄く恥ずかしい。また夫婦できていたなどとかかわれるに違いなかった。

「快斗これ可愛いよ！」

青子が向日葵のような笑顔で、行く道の店に置かれていた縫ぐるみを見せた。そんな彼女の様子が愛しくて溜まらなかった。

そんな目の前にいる幼馴染の一つ一つ見せる表情や仕草はとても

愛くるしいが、青子が積極的に手を繋いできたり、好きな人いるのと聞いてきたり。これってまさか——と過度な期待をしてしまうのはよしておこう。青子が自分のことを——と思ってしまうから。

「快斗入ろうよ！」

相変わらずホラーチック風の外装の建物の前には人がたくさん並んでいた。それを見るなり彼女は、目を煌々と宝石のように輝かせて快斗は勢いよく引っ張られた。

★

その後も快斗たちは閉演時間までアトラクションに乗るなどして楽しんだ。青子はその間も快斗を引っ張り、可愛い笑顔で快斗の仕事で疲れ果てていた体を間接的に癒してくれた。快斗は感謝の思いを胸に抱きながらも、青子に付き合った。

「はい、快斗！」

青子はゲート出る前に、前回来たのと同じようにチョコレートアイスを買ってくれた。

「今日楽しかったね、快斗」

「ああ……すごく楽しかった」

青子は横でアイスを舐めていた。すごく幸せそうな様子に、快斗の口元も軽く緩む。今この時間、この時を過ごしているだけで、大きな流れがせき止められたら良いのと思う。でもそれをは無理だけれど、いつかきつと——

衝撃

『ねえ紅子ちゃんのことどう思っているの?』

『ああ。ちよつと苦手かな』

トロピカルランドで快斗にそう尋ねて、返事を聞いたときどこかホッとして胸を撫で下ろす自分がいた。どうしてなのか自分でもよく理解できない。

紅子と快斗が時々二人だけでどこかへ行ってしまうのを青子は見たことがあった。今までなんとも思ってたし——なんとも感じなかった。それに、青子はそれを知ろうとは思わなかった。どうしてそう思うのか自分でもよく分らない。

いつも紅子は硬い表情を少しして、快斗を連れて行っていた。まるで大事な話をするときでも言うようだった。

今は、先生に頼まれたプリントを職員室へと運ぶためにその華奢な体で支えて廊下を歩いていた。たどたどしくゆっくりと、ペンギンが歩くように歩を進めた。

廊下の窓からは、校舎裏の景色がバッチリと見える。そんな時、視界に男子生徒と女子生徒が視界の奥に見えた。何を話しているのだろうか。

気になって窓に近づいてみると、女子生徒のほうは学年は一年生のようだった。黒いツインテールに、黒曜石を讃えたような色のアーモンド形の瞳をもつ妖精のような女の子。

男子生徒は運が良いのか悪いのか——快斗だった。彼はポーカーフェイスを崩そうともせず、赤くなりもしもじする女子生徒に向かい合って立っている。

一瞬でその状況がなんなのか理解した——あれは告白だ。おそらく女子生徒が快斗に言おうとしているのだろう。青子は告白現場を見るのは初めてだった——つい好奇心に駆られてそのまま見たくなくなってしまったので、窓の陰に隠れてそっと見守っていることにした。

「あの……黒羽先輩のことが前から好きでした……」

女子生徒が恥ずかしながらも、その桃色の小さな唇で必死に言葉を紡ぐ。大好きな人に思いを伝えるために。

言葉は思いと比例するというのが、その一言を言うためにどれだけの勇気が必要だろうか。青子は今まで告白をしたことも受けたこともまともに恋をしたことも無いために、想像はつかなかった。よくドラマなどで好きのすで止まって告白に失敗してしまうシーンを時々見るが、あの女の子は赤くなりながらもその言葉を伝えたのだ。どれだけ凄いか。

「……ごめんなさい」

快斗は頭を軽く下げながら、断っているのがはっきりと見える。どうして？　と思った矢先、快斗が続けた言葉は意外なものだった。

「……オレ今守りたい奴が居るんだ」

その後のことは良く覚えていない。どうやって見つからずに逃げ出したのかも。職員室に行って届けたことも鮮明になど記憶していなかった。ただ頭の中を聞かなきゃよかったという思いが支配していた。

慟哭（前書き）

お久しぶりです＞＜

しばらくスランプが続いていて、書き始めることがなかなかできませんでした。

久しぶりにちよつとづつで再開していこうと思います。

慟哭

『ごめんなさい』

快斗の告白現場なんて見なきゃよかったんだと幾度も青子は思った。快斗がモテるのは知っていたし、告白されても断っていると思っていた。快斗はどんな思いで、女の子の告白をいつも断っているのだろうか思っていたけれど、

『……オレ今守りたい奴が居るんだ』

それって好きな人が居るって事だね。だから断っていたんだ。心の中であの場で聞いた言葉を何度も反芻して、口をきゅっと固く引き結んだ。でも、どうしていいなんて嘘ついたんだろう。どうしてどうして。それに快斗の好きな人って誰なのだろう……。

それを考えると胸の内から何かがこみ上げてくるようで、無駄になるくらいに泣きたかった。どうしてなのかよく分からない。自分でも理解できないものたちが頭の中をミキサーのようにぐちゃぐちゃにしていくな。青子はあの子の言葉を聞かなかった。寧ろ聞きたくなかった。

耳の奥の鼓膜が今にも障子の紙のように少しでも触れてしまえば破けてしまいそうなくらい痛くてたまらなかった。彼らの告白現場のことを思い出すだけで、快斗の顔を思い浮かべるだけで目の奥を貫かれたような痛さをこの身に感じる。

快斗に好きな人が出来て、彼女をいつしか作ってしまえばもう傍にずっと今までのようにいられないのは分かっていた事だった。幼馴染として一緒にいた時間は戻らないから。

憎まれ口を軽くたたきあった時間さえも取り戻せないような気がしてならなかった。幼馴染として何処かへ出かけたりさえも出来なくなると思うと、心がすうっと寒い風で覆われていった。

「どうすればいいんだろう……」

聞かなければどんなに良かったのだろう。頬は濡れていく一方だ

った。

今は学校。誰にも泣いているところを見られたくなくて、校舎裏のほうへと行った。ここなら泣いていても誰にも見られない。

今にも朽ちそうなくらいの木製のベンチへと腰掛けた。見た目はいかにも昭和初期に作られたという感じだ。

顔は濡れていくばかりで、何も考えられなくなっていた。ただ自分でもよく理解できない感情と、快斗の傍にはいられないという漠然とした事実がせめぎあっているだけ。

幾度も頬を伝う雫をハンカチで拭う。

「本当にどうすればいいんだろう。なんで泣いてしまうの？」

「おい青子！」

突然後ろから声が飛び掛る。ここに青子がいるって事は誰も知らないはずだった。

後ろを振り向きたくもなかったし、泣いている顔も見せたくなくて顔を酷く深く俯かせた。案の定青子を見つけたのは、

「どーしたんだよ、青子？」

快斗だった。彼の顔を見るだけで痛くなる気がした。でも、何かをすれば快斗に心配をかけてしまうに違いない。それよりも頭の中を痛みと、快斗がどうして嘘をついたのかということや彼の好きな相手が誰なのか分からなかったという悔しさが涙ににじみ出て、今にも流れ出そうだった。

「うん。何でもないよ」

今にも流れ出しそうな涙を必死に堪えて、無理やり笑顔を作った。それをやるのは、さっき泣いていたときよりも辛くてたまらなかった。

本当は快斗や恵子に相談したくなる。でも、心配はかけたくなかった。

「そうか？　ならいいんだけどよ……」

快斗の顔は何処か満足していない感じだった。どうしてなのかよく分からない。

このままの状態を保てるのは不安だったが、今にも泣きそうな思
いを押し殺して、その後も過ごした。

間―Departures―

――いつもしてしまう願い事は、きつときつと

＊

「少しくらい抱きしめさせろよ」

少年は華奢な少女の体をぎゅっと抱きしめた。彼女の小さくて柔らかな体は彼の腕にすっぽりと収まる。少女の体から感じる体温が、徐々に自分の心を温めていってくれるようだと思っただ。彼は思った。

「か……快斗？」

彼女は戸惑っているようだった。快斗はつい本当のことを話したくなる。でも話しちゃいけないんだ。話してしまったら自分はきつと嫌われてしまう――それに戦うことさえ許されなくなる。彼女のそばにいたいことさえ許されなくなる。

彼は彼女の前では『黒羽快斗』としていることにきめていた。それは彼女を守るため。百合のような彼女を黒くて棘の迷宮のような世界に引き込みたくなかった。

「ありがとう……青子……」

心の中で絶対戻るからと付け加えた。それは快斗から少女へのしばしの別離だった。しばらくあえなくなる――だから今はこうして彼女を抱きしめていたい。たとえもうあえなくなるとしても。

だから絶対パンドラを壊してみせる。組織だって壊滅させる――だからだから、僕が戻ってきたときには笑っていて。その笑顔を見るだけでも救われるのだから。

「……快斗？」

少女の体から快斗の腕がすっとはなれた。気づいたときには彼の姿はもうなく、彼がいた場所にはまるで別れを告げるかのように一

枚の羽が落ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2025p/>

ハートの確率

2011年12月16日17時59分発行